

まんぢう振廻傳有、三人より多くは不成也、客につくと饗利饌出す、つるし柿、赤鯛、つるし柿なくば白豆腐也、鯛なくば梅干也、箸にて鯛一口喰、是は麩毒を消すゆへ、其箸にてすぐに柿を喰也、鯛柿に青葉をし、膳に箸なし、右の汁は吸計なり、是を引とすぐに本膳を出す也、

〔畠山亭御成記〕一永正十五年三月十七日、畠山式部少輔順光亭へ御成○足利義種中略

獻立○中略

五獻 まんぢう 御そへ物 ひばり

〔大館常興日記〕天文九年十月廿八日、佐方より内々以書狀尋承候、まんぢうの御ひやし汁るの事、常のてんしんのごとく、御ひさげに御ひやしるをつぎ候て参り候哉のよし承之也、仍返札に申候、更さやうに御ひさげにつきて参り候に不及候、常のてんしんのごとくには無御座候、たゞまんぢうに御ひやしるをすゑそへ申され候までにて候よし申之也、

〔雲萍雜志〕京にて大佛の餅饅頭流行し、こ、かしこにて商ふうちに、四條畷にこの饅頭を鬻げ、近江上味といふものあり、或時店先へ乞食來りて、饅頭を十ばかり賣りて給はれといふに、主人いで來て、非人には商ひせずと云ふ、乞食のいへるは、我等とても同じ人なり、錢をもて買ふに、商ひものをいかに賣らざるか、この理を聞くべしとて、言りけれども、主人は聊挨拶もなく居たりけるが、言ることのあまりにはげしければ、主人みせ先へいで、さらばその譯申し聞すべし、下に居れとて、乞食にむかひ、汝等ごとき乞食に賣らぬといへる、その子細は、乞食となりて、かやうの菓子を食はんとおもふ不所存いはんか、たなし、無益なれども耳あればき、おくべしと、乞食が、ぶりたる手拭取り捨て、我あきなへる饅頭は尋常の製にはあらず、殊に上品に造りて、高貴の方へも奉る菓子なり、左あらば乞食などの分際にて、食ふべき品にはあらざるなり、汝もしわが家の菓子を食ひたく思は、人なみくものとなりて後に、求めに來るべし、汝諸人の